

一三、四世紀イングランドにおける土地保有と共同体

—Halesowen 村の研究—

沢 田 裕 治

目 次

はじめに——視角と課題の限定——

一 共同体とその構成単位としての農家

二 相続慣習法と農地の家産的機能

三 土地移転とその統計的処理

おわりに

はじめに——視角と課題の限定——

欧米では近年、中世イングランドにおける家族や農民間の「土地譲渡」をめぐる問題に関心が高まっている。⁽¹⁾そして、かかる傾向を背景に、疫病後の農村社会については、人口の減少・停滯、人口の流動性の増大、過剰な土地及び実質賃金の上昇の結果として、大きな構造変化を被ったと論じられてきた。例えば、フェイス(R. J. Faith)は「土地に対する家族の要求は軽視されるか、ほとんど主張されなくなり、かつて土地の世襲的承継を支配していた厳

格かつ詳細な取り決めに代って、需要と供給のそれ以外のどんな規則も存在しなくなった」と論じ、バーバラ・ハーヴィ(B. Harvey)⁽³⁾もラフティス(J. A. Rafis)⁽⁴⁾とエドウィン・デヴィント(E. B. DeWint)⁽⁵⁾等のいわゆるトロント学派⁽⁴⁾も類似の見解を示している。そして最近、これらの見解やメイトランドを論拠に、アラン・マクファーレン(A. Macfarlane)は、疫病の前後を問わず中世イングランドの農村社会の基礎単位は、本質的に個人であつて家族ではないこと、農民家族の成員は ancestor-centred よりもむしろ ego-centred であつたこと、したがつて農地保有者は彼自身の権利において土地を保有する者としてみられるべきであつて、過去と未来の全体としての家族に属する財産の彼の世代における受託者としてみられるべきでないことを主張し、総じて中世イングランドの農村社会が個人主義的な農業者から構成され、彼らはいかなる家族的、共同体的な抑制もなしに自由に準資本家的生産において利益の追求を図ることができたとの見解を示している。⁽⁶⁾

こうした傾向を踏まえ、本稿は、ミッドランド西部のマナ裁判所記録及びそれを駆使したラジ(Zvi Razi)⁽⁷⁾の研究により、そこから得られる史料に照らして、主としてA・マクファーレンの見解の批判的検討を通じて、一三、四世紀イングランドにおける農村構造の実態、その具体的な存在態様の一端を土地保有、共同体との関連において実証的に明らかにしようとするものであるが、無論この小稿でその総てにわたつて全面的に論じることが到底できない。そこで、ここでは論点を「一」共同体とその構成単位としての農家、「二」相続慣習法と農地の家産的機能に絞り、疫病後の時期に関しては「三」土地移転とその統計的处理について簡単に触れることにする。

註(1) 欧米わけでも英加両学界において、この問題を扱った論文・著作の公刊が相次いでいる。

この問題、特に農民家族や相続慣行を扱った古典的研究としては、ホーヤーズ(G. C. Homans)の著名な研究 [English Villagers of the

付 表

地 域	Central England	Kent and East Anglia
耕地制度	open-field	non-open-field
相続形態	impartible	partible

註) G. C. Homans, *English Villagers of the Thirteenth Century* より作成

Thirteenth Century (Cambridge, Mass., 1941) が、彼等が地域・耕地制度・相続形態の三要素を中心として展開しているが、それを整理して示せば、表の如くなる。しかるに、その後、ハーマンが「Peasant Families and Inheritance Customs in Medieval England, *Agr. H. R.*, XIV (1966), pp. 77-95」の三点を理由に不可分相続慣行と分割相続慣行は互いに截然区別されるものではない、結びつきのあることを明らかにして、ハーマンを批判した。即ち第一に、B・マードウェルの研究にみられるように、分割相続慣行のある地域において、長男が兄弟の割当地を購入して唯一の法定相続人になる例が存在する。第二に、A・E・ンヴァットの研究にみられるように、長子相続慣行のある地域の父は、長子以外の子に遺言で土地を与える例が存在する。そして第三に、E・M・ペーシの研究にみられるように、長男が一定の土地を他の兄弟のために分離して置く例が存在する。以上を、ハーマンの論文で続ける。B・Dodwell, 'Holding and Inheritance in Medieval East Anglia', *Ec. H. R.* 2nd ser., XX (1967), pp. 53-66; D. Roden, 'Inheritance Customs and Succession to Land in the Chiltern Hills in the Thirteenth and Early Fourteenth Centuries', *Journal of British Studies*, VII (1967), pp. 1-11; C. Howell, 'Peasant Inheritance Customs in the Midlands, 1280-1700', in J. Goody, J. Thirsk and E. P. Thompson (eds.), *Family and Inheritance* (Cambridge, 1976); Do., *Land, Family and Inheritance in Transition* (Cambridge, 1983); Richard M. Smith (ed.), *Land, Kinship and Life-Cycle* (Cambridge, 1984) などが出た。また、農民間の「土地譲渡」について、C. N. L. Brooke and M. M. Postan (eds.), *Carte Nativorum* (Northants. Rec. Soc., XX, 1960); Paul R. Hyams, 'The Origins of a Peasant Land Market in England', *Ec. H. R.* 2nd ser. XXIII (1970), pp. 18-31; Anne DeWindle, 'A Peasant Land Market and its Participants', *Midland History*, IV, nos. 3 and 4 (1978), pp. 142-159; P. D. A. Harvey (ed.), *The Peasant Land Market in Medieval England* (Oxford, 1984) などが現れた。なお邦語文献としては、平松紘「イギリス荘園における農民間の『土地譲渡』」、『青山法學論集』一七巻一、一九七四年、同「中世イギリスにおける農家相続の一考察」(家族史研究編集委員会編『家族史研究Ⅰ』大月書店、一九八〇年)、所収、三好洋子『イギリス中世村落の研究』(東京大学出版会、一九八一年)、第三章「農民保有地の相続慣行」、長島武敏「中世イングランドにおける農民間の土地譲渡をめぐって」(東北大学研究年報『経済学』四三巻一、一九八一年)、同

「中世イングランドにおける農民家族と土地譲渡」、『社会経済史学』五〇巻六号、一九八五年）を参照。

- (2) Faith, *op. cit.*, pp. 86-7.
- (3) B. Harvey, *Westminster Abbey and its Estates in the Middle Ages* (Oxford, 1977), pp. 318-9.
- (4) ミンチントンを中心とする研究集団にエドワード学派の名称を与え、批判的見解を展開したのが Z. Razi, 'Toronto School's Reconstruction of Medieval Peasant Society', *P. & P.*, no. 85 (1979), pp. 141-67. (以下、Razi, *Toronto School* と略す)
- (5) J. A. Raftis, *Warboys* (Toronto, 1974), pp. 216-23; E. B. DeWindt, *Land and People in Holywell-cum-Needlingworth* (Toronto, 1971), pp. 263-75.
- (6) A. Macfarlane, *The Origins of English Individualism* (Oxford, 1978), pp. 131-64; P. D. A. Harvey, *op. cit.*, pp. 328 ff. なお、A・マッシャーレンのいうのは、井ノ田良治「日記に於ける地域社会史研究の一例——フラン・マッシャーレンのランナム・ジ・メスリンの日記研究——」（同志社大学人文科学研究所、紀要『社会科学』三七号、一九八六年）を参照。この論文は、日本近世村落の実証的成果（同『近世村落の身分構造』国書刊行会、一九八四年）を踏まえ、「歴史研究の方法的比較」（同論文、一五四頁）の視点からなされた紹介で、示唆に富む。
- (7) J. Amplett and S. G. Hamilton (eds.) 2 vols., *Court Rolls of the Manor of Hales 1270—1307* (Wors. Hist. Soc., 1910—12) (以下、*Hales Court Rolls* と略す)
- なお、*Court Rolls* を使用した邦語文献としては、松垣裕「司法組織と領主制」、『史学雑誌』七三編一〇号、一九六四年）の先駆的業績を初め、平松敏、前掲二論文、国方敬司「十三世紀末ハンドレッド裁判集会・その制度と機能」（『社会経済史学』四六巻二号、一九八〇年）、「三好洋子、前掲書第三章などがあるだけで、本格的研究は乏しい。三好氏には、東京都立大学文学部『人文学報』一一八号、一二七号、一四二号所収の未刊行史料の転写があるが、原史料の絵についてのものでないのが惜しまれる。今後、件名索引を備えた原文テキストの転写が出版されることを望みたい。
- (8) Z. Razi, *Life, Marriage and Death in a Medieval Parish : Economy, Society and Demography in Halesowen 1270—1400* (Cambridge, 1980) (以下、Razi, *Life* と略す) Do., 'Family, Land and the Village Community in the Later Medieval England', *P. & P.*, no. 93 (1981) (以下、Razi, *Family* と略す)

〔一〕 共同体とその構成単位としての農家

さて、一三、四世紀の農村構造を解明するために村落がとりあげられる訳であるが、既に拙稿において論じた如く、私にとって、村落とは共同体として問題とされなければならないものであつて、その場合、領有単位であるマナ、行政区画や地方行政機構としてのヴィルや community of the vill⁽¹⁾ あるいは行政村に対する自然村や散村が集村かといった景観的、現象的な村をもつて、村落共同体と考える訳にはいかない。⁽²⁾ こうした表面の景観や現象の背後にある生産単位としての村、Dorfgemeinde || community of the vill の成立後も消滅することなく特殊な仕方では生き続け、およそ一五、六世紀まで封建制社会の基底に存在し続けたものであると思われ。⁽³⁾

しかし、本稿で分析対象とする Halesowen におけるマナと共同体との具体的な在り方とその構造連関を説明することは、現時点では不可能である。それ故、ここでは史料上得られる示唆をいくつか指摘するにとどめたい。

第一に、裁判所記録の始まる一二七〇年の時点では既に、大修道院長は一元支配を確立し、マナ内の在地権力たるサブ・マナ領主を服属させ、大修道院長自身がサブ・マナの領主となっていたと思われること。⁽⁴⁾

第二に、マナは Halesowen という同名の市場的集落 (バラ) の他に一二の小集落を含み、その各々に開放耕地が存在したと思われること。⁽⁵⁾ バラ裁判所記録とサブ・マナである Romsley の裁判所記録が残っていること。⁽⁶⁾

第三に、各 villata は、かくまい等の犯罪によって罰せられ、また年二回イースタとミクルマスの後に開かれた Magna Curia において告発をなしてゐること。⁽⁷⁾

第四に Assize of Beer で、マナが二つの区域 circa Stouram と ultra Stouram 即ちスタウアー川の此岸

区域と彼岸区域に分けられ、⁽¹¹⁾ prepositus もその区別に従って二名選ばれている事例があり、その際領主は villata と共に prepositus を選ぶとの記載があることからすれば、⁽¹³⁾ villata の語が全体としてのマナのそれを示す広義において使用されている場合も存在し得るのではないかと思われること。⁽¹⁴⁾ 以上である。⁽¹⁵⁾

さて、一三世紀 Halesowen では、村落共同体は、開放耕地制農業を基盤とする土地の共同体的・集团的占取とその個別農家による保有という関係で存在し、土地領主がそれに緊密性・統一性の多くを付与していたと思われる。それ故ここでは、ヴァーギット保有農の土地保有も共同体的占取に媒介・規制された、共同体成員たる資格における保有であつて、共同体的土地占取を離れては存在し得ず、さらにはそれを統一的に領有する領主によって、この関係の維持が権力的に図られるという形になっていたと思われる。⁽¹⁶⁾ 例えば、一二七四年に二人の男が寡婦を妻にするよう命じられた事例⁽¹⁷⁾、一二七九年に Agatha of Hales を妻にするよう命じられた二人の男たちのうちの一方は結婚よりも罰金を選び、他方は結婚も罰金も拒否して差押えられた事例⁽¹⁸⁾、さらにまた、一二七七年にマナの自己の土地総てを放棄した John Atfield が、大修道院長からいかなる土地も保有しなくなったことを理由に相続上納物の支払を命じられた事例⁽¹⁹⁾、保有地を放棄した者に対して、家に戻って土地で生活し、それを耕作するよう命じられた事例⁽²⁰⁾等は、おそらく共同体的土地占取関係の領主による権力的な維持に関連しているのではないかと思われる。

次に、かなりな程度の「自立」性を有しつつも、なお共同体を離れては存在し得ない農家、共同体の構成単位をなす農家⁽²¹⁾即ち household の概念と機能について検討しておこう。⁽²²⁾

トニー（R. H. Tawney）は、「household」とは、単に血縁により結びつけられている人々の集団としてのいわゆる家族 family を包含するのみでなく、全く異なった機能を果たす者をも含むものであると述べ、⁽²³⁾ としてホーメンズ（G. C. Homans）も「やはり household という概念に留意し」、「household は family より actual

な working unit であった」「保有地を保有する者は家長であって、彼は保有地の農業経営を指揮し、特に父の死後、あるいは隠居後において、家長姉妹の結婚問題を処理し、彼の家に留まって家内労働力となっている兄弟への所得の適切な配分にも責任があった。この家長が責任をもつのは、その保有地の上でくらし、食事する人々全体を含み、それが彼の家人 mainpast なのである。家長は彼らの行動に責任があるので、彼らの誰かが悪事を働けば裁判所へ連れて行き、彼らの与えた損害を賠償しさえしなければならなかった」と述べている。⁽²⁴⁾このように、トニーもホームズも family と household とは別個であるとし、後者は family よりはるかに大きなものであること、そして、一五、六世紀までのイングランドの封建制社会においては、family よりも household が重要であることを結論づけているのであって、この点は極めて重要であると思われる。

では、この household は当マナにおいて実際にどのような形で現われ、どのように機能していたであろうか。それはまた family といかなる関係を有したであろうか。この点を探るため、次に若干の裁判事例を紹介しておきたい。

〔1〕 Robert Vodecocks は、彼の年下の息子が兄嫁を打擲し、それにより叫喚追跡の聲が発せられたため、その息子のために保証人を見出すべし。

Robert Vodecox invenenit (sic) plegium pro filio suo juniori qui verberavit uxorem fratris
(25)
sui unde hutesium levatum erat.

- [2] Richard Cock は、彼の息子が盗人から布地を取りそれをベイリフに引き渡さない廉により憐憫罰金。（憐憫罰金六ペンス）

Ricardus Cocus in misericordia quia filius suus cepit gerendum pannum de quodam fure et non cepit eum ballivis. (Misericordia vid.)⁽²⁸⁾

- [3] William Tewenhall は、彼の妻が大修道院長の生垣を破壊し、それにより領主の十分の一税穀物が破壊されたため憐憫罰金。（憐憫罰金）

Willelmus de Teonhale in misericordia eo quod uxor ejus fregit quandam sepe Abbatis unde decime Abbatibus erant destructe. (Misericordia.)⁽²⁹⁾

- [4] 領主の農奴 William Squier と King's Norton に住む彼の兄弟 Richard は、次回法廷に出頭すること云々。そして彼らの兄弟 Thomas は、彼らを出頭させるべく命じられる。それに違反した場合は相応の罰金云々。

Willelmus le Squier nativus domini et Ricardus frater ejus manentes apud Kynkes Norton venire ad proximam Curiam etc. Et dictum est Thome fratri eorum quod faciat eos venire

sub pena qua decet etc.⁽⁸⁷⁾

[5] 同く、Richard Mason は、Hales ヴィルの外側の彼の庭畑地で彼の娘を打擲し、叫喚追跡の声そのものを発したと告発されている：そして彼の娘 Alice 自身に責めがあると判明、それ故現場幫助のため憐憫罰金。

Item presentatum est quod Ricardus le Masoun percussit filiam suam in curtilagio suo extra villam de Hales et levavit hutesium ipsa: ad injuriam ip[sius] Alicie filie sue ideo in misericordia pro aux[ilio] et consil[io].⁽⁸⁸⁾

[6] W. Willinghurst は、彼の家人即ち Hugh の息子 Thomas のため、雪冤宣誓申立をなす。保証人 W. Hunnington。(雪冤宣誓)

W. de Willinghurst vadit legem pro eodem pro manupasto suo videlicet Thoma filio Hugonis plegius W. de Honinton. (Lex.)⁽⁸⁹⁾

[7] Illey の Roger Ketel は、彼の妻の母の相続上納物を支払わないので日々差押えられる。そして保証人同様。Illey の Richard も同様。(適正な相続上納物。支払うべき金額四シリング)

一三 四世紀イングランドにおける土地保有と共同体(沢田裕治)

Rogerus Ketel de Illeya dstringatur de die in diem quia non solvit herietum domini sui pro matre uxoris sue. Similiter et plegii. Dstringatur. Similiter Ricardus de Illeya. (Propter herietum. Finis iij s. solvenda.)⁽³¹⁾

〔1〕は、父が息子のために保証人を見出す義務を負わされている事例。〔2〕は、息子のなした不法を理由に父が憐憫金を科せられた事例。〔3〕は、夫が妻の過失を理由に憐憫罰金を科せられた事例。〔4〕は、兄弟もまたその兄弟に対して責任があり、もし兄弟が不法に立ち去った場合、彼らをマナに連れ戻さなければならなかったことを示している。〔5〕は、極めて興味ある事例である。娘は父の家人 *manupastus* であったので、父は彼女の不品行に対して、彼女の犯行の現場幫助をなすものとされ、憐憫罰金を支払わなければならなかった。〔6〕は、家長と家人との関係が必ずしも血縁関係でないことを示す重要な事例。最後に〔7〕は、家長たる男が義母の相続上納物を支払わなければならなかったことを示している。以上から明らかな如く、親族であるか否とにかかわらず彼の一家 *household* を作り上げている総ての人々の行動に対する家長の責任が示されている。家長が責任を負う家人の範囲は、妻、息子、娘、兄弟姉妹、それから血縁関係がないと思われる家人をも含み、その内容も、刑事的なものに限らず民事的なものも見うけられる。このように、当マナにおいても、*household* はむしろ *family* よりも重要な機能を果たしていたと思われる、正しく *actual working unit* であったであろう。⁽³²⁾

註(1) 拙稿「十三世紀末葉イングランドにおける村落共同体の歴史的 성격——パークシア・ブライトウォールトン村の地代慣習帳の検討——」(『早大法学論集』三二号、一九八四年)

- (2) 沢田、前掲論文。特に「一 問題と方法」以下の点にかゝる基本的認識を述べているので、参照して頂ければ幸いである。
- (3) 生産単位としての村 Dorfgenossenschaft と権力単位としての村 Dorfgemeinde の両概念を初めて明確にしたのは K. S. Bader, 'Entstehung und Bedeutung der oberdeutschen Dorfgemeinde', *Zeitschrift für württembergische Landesgeschichte*, I, Jahrgang (1937), S. 264-295 であるが、K. S. Bader のこの論文の意義については、世良晃志郎『歴史学方法論の諸問題〔第二版〕』（大鐘社 一九七五年）二六七頁、参照。
- (4) *Hales Court Rolls*, I, pp. 3, 7, 12 など、Hasbury の Hugo を *ibid.*, I, pp. 33, 170, 171 など、Hunnington の Henry の例など。
- (5) Razi, *Life*, pp. 5-6. 一二の小集落名は、次の通りである。① Oldbury ② Langley-Walloxhall ③ Warley ④ Cakemoor ⑤ Hill ⑥ Ridgeacre ⑦ Lapal ⑧ Hawre ⑨ Hasbury ⑩ Hunnington ⑪ Illey ⑫ Romsley. 上記の Romsley は、Razi の *Life* の 10-11 頁に、Romsley が、この最大の集落であった。各々一三〇〇年頃と一三〇〇～一三五〇年の農家を数えた。他の hamlet は、それぞれ一〇～一〇〇戸を数え、それより多く Illey は、六百を越えた。
- (6) Razi, *Life*, p. 6.
- (7) *Ibid.*, p. 6. 一二二一年から一四三三年までの裁判所記録が良好な保存状態で残っている。そのリマスクリップは、Birmingham Reference Library 346512 et seq. に収蔵・保管されている。
- (8) Romsley 裁判所記録は Halesowen の裁判所記録の裏面に附として見出される。裏面に記された Romsley 裁判所記録は、*Hales Court Rolls*, II, pp. 583-593 に Appendix として載せられている。Court of Romsley は Court Baron、即ち土地に関する管轄権を有する裁判所であったのである。この裁判所の普通の事務を処理している。Romsley は Hales の一つの裁判所の関係は、Court of Romsley なる Court of Hales と上訴する。裁判を理由に Court of Romsley と罰金と料金を課せられた事例が存在している（*Hales Court Rolls*, I, pp. 162, 165）など、推して下級裁判所と上級裁判所の関係を有していると思われる。
- (9) 徳文は *Hales Court Rolls*, I, p. 161 の 'Villata de Hampsted in misericordia pro concealmento', *ibid.*, II, p. 310 の Villata de Hulle の例など。
- (10) *Hales Court Rolls*, I, pp. 68, 105, 111, 229, 243; *ibid.*, II, pp. 280, 305, 355, 369, 425, 447, 469, 488, 499, 505, 535, 547, 562. この中で Magna Curia は、一二七〇年から一三〇七年までの間には記録がなく、一〇一回の訴訟のちやうど一回が確認される。この表

廷において各 Villata が特別の告発をなした例は、枚挙に遑がない。これらの法廷で取扱われた特別の仕事は、道路や橋梁即ちその起源においてマナ裁判所よりもっと大きい何かに属する裁判管轄権に関係していたと思われる。

- (11) *Hales Court Rolls*, I, p. 7.
- (12) *Ibid.*, I, p. 251; *ibid.*, II, p. 549.
- (13) *Ibid.*, I, p. 17.
- (14) *Ibid.*, I, p. 14.
- (15) 当マナの地理的・歴史的基礎やマナ裁判所記録そのものに即した分析は、残念ながら本稿ではほとんど採り上げることができなかった。これらについては、別稿を予定している。
- (16) メイェランのほぼ同様の認識については、F. W. Maitland, *Township and Borough* (1898), p. 24.
- (17) *Hales Court Rolls*, I, p. 55.
- (18) *Ibid.*, I, p. 119.
- (19) *Ibid.*, I, p. 79.
- (20) *Ibid.*, I, pp. 133, 141.
- (21) 沢田、前掲論文、二二頁註(2)参照。そこにおいて既に筆者は、吉岡昭彦氏の村落共同体の捉え方即ちヴァーギット保有農 Virgarii を標準的自立保有農とし、「小農経営」を単婚小家族の点から考えていこうとする村落共同体の捉え方に疑問を呈し、「村落共同体の再生産構造を支えるのは、『農家経営』(それ故、非血縁者を含む)、しかも『農家』と『農家』との共同を不可欠とするそれであることに注意しなければならない。ヴァーギット保有農 Virgarii といえども決して自立した存在ではないのである」と述べた。
- (22) 中世社会における family よりもむしろこの household 概念が重要である点については、法制史学会第三三回研究大会における栗原真人氏の研究報告(「一七・一八世紀イングランドにおける婚姻継承財産設定 Marriage Settlement について」)に対する質疑の形で提示する機会があったが、本稿はその際舌足らずに終った論点を展開する意味をもちうる。
- (23) R. H. Tawney, *The Agrarian Problem in the Sixteenth Century* (London, 1912), Harper Torchbook ed. (1967), p. 233.
- (24) Homans, *op. cit.*, p. 209.
- (25) *Hales Court Rolls*, I, p. 24. (127L. 5. 5)

- (26) *Ibid.*, I, p. 76. (1276. 1. 14)
 (27) *Ibid.*, I, p. 33. (1271. 10. 7)
 (28) *Ibid.*, II, pp. 562-3. (1307. 4. 26)
 (29) *Ibid.*, I, p. 223. (1293. 3. 25)
 (30) *Ibid.*, I, p. 186. (1282. 3. 18)
 (31) *Ibid.*, I, p. 52. (1274. 5. 9)
 (32) 農家 household とその規模については、篠塚信義「マナー社会と雇傭労働者」(『史学雑誌』七二卷三号、一九六三年)、同「イギリス・マナー体制下の農家構成とその規模に関する史料」(『北海道大学人文科学論集』四号、一九六五年)を参照。

〔二〕 相続慣習法と農地の家産的機能

法的には Halesowen では、土地は、family や household によって保有されたのではなく、それを譲渡し得る諸個人によって保有されていたといえ、一二七〇年から一三四八年までの間に当教区の大部分の土地は、血縁や婚姻等を通じて伝えられた。⁽¹⁾ 表1で明らかなる如く、この時期の一、一二五件の土地移転のうち、親族内的なものが七一件(六三%)であったのに対し、親族外的なものが四一二件(三七%)であった。ところで、これらの数字は、件数を示すだけで規模を明らかにしない。しかし、いわゆる狭義の農民間の「土地譲渡」として取引される親族外的な土地移転では、主として二、三セリオンとか数エイカ程度の小地面が取引されたのに対して、親族内の場合、普通、保有地の全体又は半分の地面が移転された点に特に留意しなければならない。そして、この点を考慮してラジは、六、九一六エイカ(八〇%)⁽²⁾ が親族内的に移転されたと見積っている。

〔表1〕 Halesowen 裁判所記録 1270—1348で認められた1,125件の土地移転

	件 数	面 積
親 族 内	713 (63%)	6,916エイカ (80%)
親 族 外	412 (37%)	1,383エイカ (20%)
計	1,125 (100%)	8,299エイカ (100%)

註) Zvi Razi, 'Family, Land and the Village Community in Later Medieval England', p.4より作成

〔表2〕 Black Death 直前の保有地維持率と農民階層

	A	B	$C = B / A \times 100$
富 農	40 (23%)	40	100%
中 農	64 (37%)	58	90%
貧 農	70 (40%)	25	35%
計	174 (100%)	124	71%

註) Zvi Razi, 'Family, Land and the Village Community in Later Medieval England', p. 5 より作成

A : 裁判所記録1270—1282で確認された土地保有家族数

B : Black Death 直前の土地保有家族数

C : 保有地維持率

ただしB, C欄の数字は計算のあわないところがある。

かかる状況において、多くの保有地は数世代にわたって同一家族の手中にとどまったのである。次に、これを表2の Black Death 直前の保有地維持率と農民階層についてみれば、一七四家族のうち一二四家族（七二％）が保有地を維持し、五〇家族がその維持に失敗していることがわかる。そしてこれをさらに階層別にみると、富農と中農がほぼ完全にその維持に成功しているのに対して、貧農はわずか二五家族（三五％）しか成功していない。この点は、土地を手放すことを余儀なくされた農民は、圧倒的に、貧農階層に属する者が多かったこと、保有地を喪失した貧農四五家族の多くは、それを富裕な隣人に徐々に売却し、その他の残余の家族は一三一〇年代に当教区を襲った飢饉、生存危機によって一掃されたことを示しているように思われる。ここに、富のヒエラルヒーの存在が如実に示

されているであらう。⁽³⁾

しかし、いずれにせよ、疫病前には、八〇%にのぼる土地が親族内的に移転されたのに対し、二〇%が親族の外部へ移転された状況、換言すれば、農地が家産として機能する状況が存在するが、では、かかる状況は当時の如何なる法制度・慣行の下で生じ、またそれと如何なる關係に立っていたのであろうか。A・マクファーレンの主たる論拠であるメイトランドを検討していこう。⁽⁴⁾

つとにメイトランドは、一三世紀以降イングランドの土地相続法においては、フランス慣習法とは異なり、厳格な長子相続制の普及と相俟って、相続人の同意を要しない譲渡の自由が成立したことを述べている。即ちメイトランドによれば、長子相続制の普及と密接に関連して「一三世紀には、單純封土権者は生存者間 *inter vivos* の行為により、自分の土地の総てを譲渡することによって、彼の期待相続人たちの期待を裏切る完全な權利を有する。我が法は『何人も生存者の相続人たることなし』 *Nemo est heres viventis*. の法諺を把握しつつある⁽⁵⁾」と述べられ、そして期待相続人のための譲渡制限の消滅について触れ、「ブラクトンは古い制限は何も知らない——というよりはグラントンの書物を前にして意図的に古い制限を無視している。それはあまりにも廢れてしまったので語るに値しなかったからである。封建公示譲渡の捺印証書における『及びその法定相続人』 *and his heirs* の文言は、法定推定相続人 *heir apparent* に何も与えない⁽⁶⁾」と語り、さらに、その変化が突然に生じ、かつ他のヨーロッパ諸国に比し、イングランドに固有な特殊イングランド的法概念、法制度を作り上げたことを指摘して、「いずれにもせよ、一二〇〇年頃の我が法は、他の場所では緩慢にしか成し遂げられなかった手術を甚だ迅速に行った。海外では概して期待相続人の權利は次第に親族取戻 *retrait lignager* の形態をとって現われた。土地所有者は、必要のある場合でなければ、その期待相続人の同意なくして土地を譲渡してはならない。そして必要のある場合でさえ、相続人たちは土地を

譲り受ける機会を有するに相違ない。もしこれが彼らに与えられない場合には、一定期間——それはしばしば一年と一日である——内に、彼らは、譲受人が支払った価額を彼に差出して譲受人からその土地を要求することができる」と語っている。⁽⁸⁾

そして、先のA・マクファーレンの個人主義的中世イングランド社会像の主たる論拠が、このメイトランドにあったことが重要であると思われる。⁽⁹⁾ A・マクファーレンは、ホームマンズの見解を紹介しつつ、その見解に対する彼の批判を展開している。⁽¹⁰⁾ 即ちホームマンズによれば、たとえ年下の子供が多くを期待できないとしても、彼は少なくとも労働を提供する用意があり、結婚しない限り、長子相続制の地域では、扶養を受ける生涯権を有した。かくて「家族地」には生得権が存在した。長子相続制の地域における長男の生得権と分割相続制の地域の息子たち全員の生得権は、さらに強力なものであると考えられた。土地は「血縁」を通して流れ下る。土地は家族から外部には譲渡され得なかった。このように主張するホームマンズに対し、A・マクファーレンは、しかし問題の最重要点は、誰が土地を「所有」したかである、と問いを發し、それは家族集団であったとみなすのは容易いが、これは誤解であって、土地は家族集団に属したのではなく、個人に属した。このことは、一三世紀以降の自由保有態様と慣習保有態様の双方についてあてはまる。長子であれ、その他の子であれ、子の譲渡できない生得権は存在しなかった、と答えているのである。⁽¹¹⁾

しかし、既に見た表1の数字は、土地保有者が彼らの農地を譲渡することを許す法的状態にもかかわらず、彼らにそうするのを許さないような、彼らの家族に対する強い道徳的義務を彼らが有していた事実を充分証拠立てている。そしてさらに、村民たちが、彼らの農地を household に属するどの成員もそれによって扶養されることを要求する機会をもったという意味で household 全体に属するものとみなしていたことを示す事例が多く存在している。

なるほど、相続法という法制度の上では、厳格な封建制度に照応する厳格な長子相続制の普及するに従い、相続人

の同意を要しない譲渡の自由が成立したこと、このことは全く異論のないところであろう。それでは、この相続法において土地保有の基礎単位が土地保有者個人に徹底されていること——土地保有単位の個性——及び相続人の同意を要しない譲渡の自由という法制度乃至法理は、当該社会とりわけ農村社会において、どのような規範の有効性と社会的実効性 *Soziale Gultigkeit* を有したであろうか。⁽¹²⁾それは、A・マクファーレンが論ずる如く、中世イングランドの農民は、彼がひとたび保有地に対する法的権原を取得するや、法律上、相続人の同意を要しない譲渡の自由をも有するが故に、社会的にも彼の *household* の成員を扶養する道德的義務をも負わないのが普通であったといつてよいであろうか、またこの意味で保有単位の個性と譲渡の自由という法制度乃至法理が農地の家産的機能と矛盾・抵触し、それを媒介し得なかったといつてよいであろうか。

Halesowen では、不可分相続 *impartible inheritance* が実施されていたにもかかわらず、あるいはむしろそれ故にこそ、両親は普通、相続外の子供たちに、付加的な土地を獲得するか、本来の保有地規模を縮小するかのいずれかの方法によって、土地を賦与しているのである。しかも、家族の土地をその成員総てを養つていくために利用する道德的義務は、両親のみならず兄弟姉妹によつても表明されている。

[8] 以下のことを記録すべし。Roger Ketel は、領主の許可により、彼の兄弟 John と、Illey に所在する彼の父 Roger に属した保有地の総てをその総ての付属物とともに彼自身及びその直系卑属たる法定相続人に永久に譲与する。そして、もし彼が相続人なくして死亡した場合、上記保有地の総てはその付属物とともに上記 Roger とその法定相続人に復帰すること。さらに、同 Roger のために上記保有地内に一定の土地を

留保し、そこに彼が生涯間、自由に出入でき、かつ Stanford 耕地に所在する四セリオンの土地とともに保有する部屋を四年以内に彼のために建築すること。なほに上記 John は、上記 Roger に彼の全生涯間、毎年半クォータの穀物と一クォータのオート麦を、即ちシクルマスに半分と三月の聖母マリアの受胎告知日にもう半分、与えること。さらに同 John は、上記保有地云々の総ての賦役をなすこと、しかして彼は、許可料として一マークを与える。そして彼は忠誠の誓いをなす。

Memorandum quod Rogerus Ketel per licentiam domini concessit Johanni fratri suo totum tenementum quod fuit Rogeri patris sui in Illeley cum omnibus suis pertinentiis sibi et heredibus suis in perpetuum de corpore suo legitime procreatis et si decesserit sine herede de se quod totum predictum tenementum cum suis pertinentiis predicto Rogero et heredibus suis revertatur Salva etiam eidem Rogero quandam placea terre infra tenementum predictum in qua edificabit sibi cameram tenendam ad totam vitam suam cum libero ingressu et egressu ad eandem et cum quatuor selionibus terre jacentibus in campo de Stanford ad terminum quatuor annorum. Dabit etiam dictus Johannes predicto Rogero ad totam vitam suam singulis annis dimidium quarterium bladi et unum quarterium avene videlicet medietatem ad festum Sancti Michaelis et aliam medietatem ad Annunciationem Sancte Marie in Martio. Faciet etiam idem Johannes omnia servicia que de predicto tenemento etc. Et dat pro licentia unam marcam. Et fecit feoditatem.⁽²²⁾

また、土地保有者は普通、年老いて引退した彼らの両親の世話をし、その扶養をしている。しかし、親が隠居するに際して、将来、法定相続人による虐待のおそれのある場合には、彼はマナ裁判所に赴き、彼の保有地を手渡す人物と正式の扶養契約を結ぶこともできた。次の例は、この種の取り決めのうち最も詳細なものの一つである。⁽¹⁴⁾かなり長いが内容上重要であると思われるので、省略することなく全文を紹介しておく。

[6] Thomas Brid は、彼の母 Agnes Brid との間に領主の許可を得てなされた契約の条項に従い彼の母 Agnes Brid の土地を得たが、彼はそれを占有し、かつ立入をなすに正当なことを領主になすために保証人を見出す。即ち Sibily の息子 Thomas, Willam Ley。

これは、一方当事者 Hales 在 Ridgacre の Thomas Brid の寡婦 Agnes と、他方当事者、彼女の年長の息子 Thomas との間に、エドワード王治世第九年シモンとユダの祝祭日の直前の木曜日〔一二八一年一月二三日（本法廷の五日前）〕になされた契約である。上記 Agnes は、彼女が上記 Ridgacre ヴィルに有する総ての土地を、総ての物と場所に付属する彼女の総ての物とともに上記 Thomas に譲渡する。即ち上記 Thomas は、以下の条項で上記 Agnes に、彼女が生きている限り必要な一切を充分に、かつ名誉にかけて供給する。即ち上記 Agnes は、上記国王治世第一〇年のミクルマス〔一二八二年九月二九日〕に、一クオータの小麦、一クオータのオート麦及び一ブッシェルのえんどう豆を最初に同 Thomas から受領する。同じく、その直後の諸聖人の祝祭日〔十二月一日〕に荷車五台分の石炭を同人から受領する。同じく、クリスマス⁽¹⁵⁾の八日前の日〔二月一六日〕に、一クオータの小麦、一クオータのオート麦及び一ブッシェルのえん

どう豆。同じく、聖金曜日に一クォータの小麦と一クォータのオート麦。同じく、聖霊降臨祭に良質鍔貨で五シリング。同じく、施洗者聖ヨハネ誕生の日〔六月二四日〕に、半クォータの小麦と一クォータのオート麦。同じく、上記 Thomas は、内壁の長さ三〇フィート、幅一四フィートで、その壁の周囲には柱と三つの新しい適当なドアと二つの窓をもつ住みよい住宅を、彼自身の費用で Agnes のために建設しなければならぬ。そして、上記の一切を前述の期日に同 Thomas から Agnes 自身は、彼女が生きている限り毎年永続的に充分に受領する。そして、上記 Thomas は、それらを上記期日に彼自身か彼の家族の誰かによって Agnes 自身の家に運搬する。しかして、Thomas 自身が、上記土地に付属すると知られている慣習地代や賦役の総てにつき責任を負う。そして、もし上記 Thomas に穀物を用意することができない事情が生じた場合、選別された播種用のものを除き、上質小麦の市場価格に従い、正貨銀で同 Agnes を満足させなければならない。そして、もし彼に上記期日に上記契約の不遵守が前提される事情が生じた場合、上記 Thomas は、上記 Agnes が二人の適法な人間の証言に基づき Hales の領主大修道院長と修道会の強制力に特別に訴えることを必要とする度毎に、Hales の修道会の施物係に半マークを支払わなければならない。そしてその時以降、上記 Agnes は、土地そのものを、財産の如く属する彼女の総ての物とともに取り戻し、かつ、そのあらゆる点で彼女の望む総てを、いかなる条項が言及されたにかかわらずなすことができる。そして、上記の総てが絶えず有効であるように、かつ、Hales の法廷で読み上げられる以前に総ての証言を一語一語忠実に前もって報告されるように、両当事者の望みにより領主大修道院長と修道会自身の地代帳に永続的に記憶しておくために記入される：当時大修道院長であった領主 Nicholas とその場に居合わせた当時 Cellarer であった Brother Geoffrey の面前より。

Thomas Brid qui capit terram Agneis Brid matris sue secundum formam conventionis de licentia domini inter eos facta habet inde seysinam et ad faciendum domino quod justum fuerit pro ingressu habendo invenit plegios, scilicet Thomam filium Sibille, Willelmum atte Leye.

Hec est conventio facta inter Agnetam relictam Thome Brid de Rugacre in Hales ex parte una et Thomam filium suum seniozem ex altera anno regni Regis E[dwardi] nono die Jovis proxima ante festum Apostolorum Simonis et Jude videlicet quod dicta Agnes tradidit dicto Thome totam terram suam quam habuit in dicta villa de Rugacre cum omnibus suis pertinentiis in omnibus rebus et locis Ita videlicet quod dictus Thomas omnia necessaria dicte Agneti honorifice et plenarie inveniet quoad vixerit in hac forma videlicet quod dicta Agnes in festo Sancti Michaelis anno regni regis predicti decimo primo percipiet ab eodem Thoma unum quarterium frumenti et unum quarterium avene et unum modium pisarum. Item in festo Omnium Sanctorum proxime sequenti percipiet quinque caretas carbonum maris ab eodem Item octavo die ante festum Nativitatis Domini unum quarterium frumenti unum quarterium avene et unum modium pisarum. Item in die Parasceves unum quarterium frumenti et unum quarterium avene. Item in die Pentecoste quinque solidos bone monete. Item in die Nativitatis Sancti Johanes Baptiste dimidium quarterium frumenti et unum quarterium avenarum. Item dictus Thomas debet construere ad Agnetam propriis sumptibus unum mansum

competens ad inhabitandum continens xxx pedes longitudinis infra muros et xiiij pedes latitudinis infra ambitum murorum cum postibus una cum tribus hostiis novis competentibus et cum duabis fenestris. Et omnia predicta ad premissos terminos ab eodem Thoma ipsa Agnes in perpetuum singulis annis quoad vixit plene percipiet. Et dictus Thomas ea ad domum ipsius Agnetis faciet ad dictos terminos per se vel per aliquem de sua familia caruari. Et ipse Thomas respondebit domino de omnibus consuetudinibus et serviciis que ad dictam terram noscuntur pertinere. Et si contingat dictum Thomam bladum in promptu non habere satisfacere debet eidem Agneti in argento secundum pretium melioris frumenti in mercato extra seminario electo. Et si contingat eum dictam conventionem ut premititur ad predictos terminos non observare obligat se dictus Thomas totiens ad solvendum dimidiam marcam ad pitanciam conventus de Hales quotiens dicta Agnes sub testimonio duorum legalium virorum compulsionem dominorum Abbatis et conventus de Hales necesse habuerit ad hoc invocare. Et quod ex tunc liceat dicte Agneti ipsam terram cum omnibus suis pertinentiis tamquam propriam resumere et totum velle suum per omnia inde facere non obstante in aliquo forma memorata. Et ad robur perpetuum omnium predictorum et fidele testimonium omnia de verbo ad verbum ut premituntur priusquam in plena curia de Hales recitata sunt in rentali ipsorum dominorum Abbatis et conventus ad perpetuam memoriam sunt ascripta ad rogatum partium predictarum: domino Nicholao tunc existente Abbate coram fratre Galfrido tunc Celerario ibidem.⁽¹²⁾

右の事例にみられる通り、寡婦 Agnes が隠居するに際して、その保有地を長男 Thomas に手渡すに当って締結された扶養契約の条項は、まことに詳細を極めており、母子関係でそこまで規定しなくてもよいのではないかと思われる程、具体的な場合について、いちいち具体的に規定している。そこには、信頼関係よりもむしろ不信がにじみ出ているように思われる。この扶養契約の意味を理解するには、勿論、この契約の背後にその前提として存在する事情、契約締結に至った事情を考えなければならないが、この事例の場合、かかる扶養契約の締結に至らしめたものが、以前の両者間の紛争関係にあり、扶養契約締結そのものが紛争の所産であると思われる。⁽¹⁶⁾この意味で、〔9〕は特殊・例外的な、むしろ特異なケースといつてよい。そして、一般的には、扶養契約なしに保有地を息子たちに与えるのが普通だったのである。⁽¹⁷⁾

そしてさらに、注目すべきは、このように世襲的承継がなされる場合、次のような慣行が存在していることである。

〔10〕 William Bude の息子 William は、彼の父の総ての土地に対して相続料を支払うが、それは彼の父の生存中は $\frac{1}{2}$ を、死後は全部を相続料なしで保有するためである。保証人、Richard の息子 Thomas, Philip Belegambe。(相続料八シリング)

Willelmus filius Willelmi Bude totam terram patris sui releviat tenendam dimidietatem
tempore patris sui et post obitum patris sui totam sine relevio. Plegii Thomas filius Ricardi,

Phillip Belegambe. (Relevium viijs.)⁽⁸²⁾

この事例では、世襲的承継による保有地の相続が、一定の時点（例えば土地保有者の死亡時や隠居時）に、一挙に包括的になされるのではなく、段階的・部分的になされている。期待相続人は、彼の父の総ての土地に対して相続料を先払いすることによって、父の生存中は保有地の $\frac{1}{2}$ については、その土地を相続して保有者となり、死後はその全保有地を保有することとなる。相続料の先払いによって息子は保有地の $\frac{1}{2}$ を保有し、残る $\frac{1}{2}$ を父が保有する慣行は、老いてはいるがまだ働くことのできる父が、保有地の $\frac{1}{2}$ を息子に譲る一方、残る $\frac{1}{2}$ で自己の生存の確保を図ろうとしたことに基づく。息子の側としても、相続料の先払いにより、期待相続人という法律上不安定な地位を脱して保有地の $\frac{1}{2}$ を確定的に保有し、さらには、残る $\frac{1}{2}$ についても父の死亡をいわば停止条件として保有することとなつて、相続料が先払いされた時点で既に残る $\frac{1}{2}$ の土地について、その相続権が約束されることになる。

ここには、土地保有者と期待相続人の双方の「権利主張」を巧みに調整・満足させる農民の知恵が示されていないであろうか。

註(1) 以下、Razi, *Family* による。周知の如く、隷農土地保有者は、国王裁判所によって認められる相続権を有しないが、しかしマナ裁判所は彼の権利が領主以外の万人に対して相続し得るものであることを認めた。F. Pollock and F. W. Maitland, *The History of English Law*, 2nd ed., with a new introduction by S. F. C. Milsom (Cambridge, 1968), i, pp. 379-83; ii, pp. 278-9; C. M. Gray, *Copyhold, Equity, and the Common Law* (Cambridge, Mass., 1963), p. 7 參照。

(82) Razi, *op. cit.*, pp. 3-5.

- (3) *Ibid.*, p. 5. ナズ Razi, *Life*, p. 37 ナ 農民間の「土地譲渡」の増加理由として、金銭債務を返済し、地代や許可料を支払い、食糧や種籽、家畜を購入するため、小土地保有者がその土地をサン・ベッターしたり、売ったりすることを挙げている。
- (4) ナ Pollock and Maitland, *op. cit.*, ii, pp. 260 ff.
- (5) *Ibid.*, p. 308.
- (6) *Ibid.*, p. 311.
- (7) *Ibid.*, pp. 309-11.
- (8) *Ibid.*, p. 313.
- (9) A・マッソナーレンは、自由土地保有の生前の譲渡性という一般に知られた事実を彼自身再発見して論を進めるが、その際にはほとんど専らメイトラントに依拠する。しかし、メイトラントは、主として上層階級の間での自由保有(例えば軍事的土地保有)について述べている。この点、A・マッソナーレンは、多くの地域で、農民の土地が隷農土地保有により保有されたことの意味を無視し、あたかもそれが十六世紀の贍本保有に等しいかの如く、それを自由保有に同化せんといふ。この厳しい批判を受けている[R. H. Hilton, 'Individualism and the English Peasantry', *New Left Review* 120 (1980), p. 109-11]。我々は、この批判を踏まえ、十三世紀前半にマナ裁判所の領主たちが国王裁判所に基づいて使用された手続の形式を自由に借用しつつある事実をも述べなければならない。
- (10) A. Macfarlane, *op. cit.*, Chapter 5.
- (11) *Ibid.*, pp. 102-3. ナズ 傍点は原文。
- (12) E. Ehrlich, *Grundlegung der Soziologie des Rechts* (1913), S. 173 ff.; G. Jellinek, *Allgemeine Staats Lehre* (1922), S. 333 ff.
- (13) *Hales Court Rolls*, II, p. 481. (1304. 6)
- (14) E. Miller and J. Hatcher, *Medieval England: Rural Society and Economic Change, 1086-1348* (London, 1978), pp. 136-7.
- (15) *Hales Court Rolls*, I, pp. 165-6. (1281. 10. 28) ナズ註記中「」括弧内の語句は沢田。
- (16) *Ibid.*, I, pp. 108, 110.
- (17) Razi, *Family*, pp. 7-8.
- (18) *Hales Court Rolls*, I, p. 14. (1270. 6. 13)

〔三〕 土地移転とその統計的处理

既述の如く、疫病後の時期において、農村社会は大きな構造変化を被り、土地に対する家族の要求は軽視されるか、ほとんど主張されなくなり、かつて土地の世襲的承継を支配していた厳格かつ詳細な取り決めに代って需要と供給のそれ以外のどんな規則も存在しなくなったと論じられてきた。⁽¹⁾ フェイスを初めB・ハーヴィ、ラフティス、E・B・ダヴィント等の史料分析に基づく実証的研究は、いずれも疫病後の経済的・人口学的条件が根本的に変化したと主張し、総じて疫病後の農村社会の構造変化を強調する点で一致している。A・マクファーレンも、この点では同様で、彼の場合、これらの見解や実証的分析・統計に基づきつつ、⁽²⁾むしろそれらをメイトランドの法理論に依拠して、理論的にも総合した点に特徴がある。土地保有単位の個人性及び相続人の同意を要しない譲渡の自由を基礎として展開される、個人主義的中世イングランド社会像がそれである。しかし、これらの諸研究で提示される土地移転やその統計的处理については、問題がなくなはないと思われるので、そのいくつかについて触れておくこととする。

なるほど、これらの諸研究が主張する如く、疫病後の経済的・人口学的条件がそれ以前と非常に異なっていたことは確かである。だがしかし、問題は、どの程度これらの新しい条件がそれ以前にみられた家族的紐帯や共同体的紐帯を弱めたか、にある。⁽³⁾

表3は、疫病後の土地移転を示している。これを件数の点からみると、移転総数の五七％が親族内のものということになるが、この数字は明らかに、親族内土地移転を過少評価するものである。その理由は、第一に、家系的情報が不完全であるからであり、第二に、親族内移転の土地面積が非親族移転のそれよりも、はるかに広いからである。この点を考慮して、ラジは、親族内土地移転面積は、全体の七一・三％にのぼると推定している。⁽⁴⁾

〔表3〕 Halesowen 裁判所記録1351—1430に記録された土地移転

	死 後		生存者間		領主による譲与		移転 総数	親 族 総 数	非親 族総 数
	親 族	非親 族	親族	非親族	親族	非親族			
1351— 60	14	1	3	10	—	11	39	17(43.6%)	22
1361— 70	35	2	4	18	—	10	69	39(56.5%)	30
1371— 80	17	1	10	13	—	9	50	27(54.0%)	23
1381— 90	15	—	5	6	1	9	36	21(58.3%)	15
1391—1400	24	2	9	12	1	10	58	34(58.6%)	24
1401— 10	27	1	14	15	—	17	74	41(55.4%)	33
1411— 20	28	1	7	8	—	3	47	35(74.4%)	12
1421— 30	14	1	9	6	1	13	44	24(54.5%)	20
総 計	174	9	61	88	3	82	417	238(57.0%)	179

註) Zvi Razi, 'Family, Land and the Village Community in the Later Medieval England', p. 17. 夫から妻、妻から夫への譲与は非親族移転とみなされた。

〔表4〕 姓のみ使用による潜在数と潜在率

土地移転件数	親 族 内			
	A親族内件数	B姓のみ使用	C 潜 在 数	C/B 潜在率
417	238(57%)	132(32%)	106	0.8

註) Zvi Razi, 'Family, Land and the Village Community in the Later Medieval England', p. 19より作成

Aをxとすると $x = 132 + 132 \times 0.8$

ラジの示した数字は、従来の諸家の数字に比し、かなり高くなっているが、この数字の違いが生じる原因は、当マナの安定した家族構造にあるのではなく、研究方法と史料とにあると思われる。第一に、従来、姓が唯一の指標として使われた結果、姓が異なる親族関係が隠されていたからであり、第二に、従来使用された史料がかなり断片的であって、一三五〇年から一四〇〇年の時期の包括的な家族再構成を一定程度可能にする史料が使用されなかったからである。

そこで、姓のみ使用した場合、親族関係がどの程度隠されるか、その潜在数と潜在率についてみると、表4から明らかなように、姓のみ使用

の場合は親族内土地移転が一三二件しか検出し得ず、一〇六件の親族内土地移転が隠されており、結局、潜在率は〇・八となる。言い換えれば、姓を唯一の指標として示された従来の数字の背後に、さらにほぼ八割の親族内土地移転が隠されてきたことになる。勿論、当マナの場合に得られた数字をもって一般化することは、厳に慎まなければならぬといえ、予め仮平均を設定する算術に類した意味でなら、この潜在率を使って、おおまかな親族内件数を暫定的に推定することも許されよう。

註(1) 前述「はじまり」参照。

(2) A・マクファーレンの研究の実証的根拠の一部を提供しているリチャード・スミスの文献でいうのは、R. M. Smith, 'Kin and Neighbors in a Thirteenth Century Suffolk Community', *Journal of Family History* 4 (1979), pp. 219-56; Do., 'Some Thoughts on "Hereditary" and "Proprietary" Rights in Land under Customary Law in Thirteenth and Early Fourteenth Century England', *Law and History Review* 1 (1983), pp. 95-128; Do. ed., *Land, Kinship and Life-Cycle* (Cambridge, 1984) を参照。

なお、このスミスとマレンとの間に現在、内容の濃い極めて注目し得る論争が熾烈に闘われているが、それは主としてマナ裁判所記録の人口史的分析への利用可能性やその方法をもめるものであり、本稿の結論に影響を与えぬものではない。L. R. Poos and R. M. Smith, 'Legal Windows onto Historical Populations'? Recent Research on Demography and the Manor Court in Medieval England', *L. & H. R.* 2 (1984), pp. 128-52; Z. Razi, 'The Use of Manorial Court Rolls in Demographic Analysis', *L. & H. R.* 3 (1985), pp. 191-200; Poos and Smith, 'Shades Still on the Window', *L. & H. R.* 3 (1985), pp. 409-29 参照。文献の所在については井ヶ田良治氏から御教示を頂いた。

(3) Razi, *Family*, p. 16; Do., *Toronto School*, pp. 141 ff.

(4) *Ibid.*, p. 17.

(5) *Ibid.*, pp. 18-19. なお、三好洋子「イギリス中世村落における姓の変動」(イギリス中世史研究会編『イギリス中世社会の研究』山川出版社、一九八五年、所収)は、姓の変動の激しかったことを述べている。

おわりに

以上、みてきたように、一四世紀イングランドの農村構造は、少なくとも当マナに関する限り、疫病後の経済的・人口学的条件の変化にもかかわらず、基本的には、一三世紀と同質の社会構造を有しており、それは依然として household が重要な意義を担い、農地が家産として機能することを求める社会であった。⁽¹⁾

相続法理における Nemo est heres viventis. の原則は、相続権の発生時点を画する原則である。保有者は死亡のその瞬間まで保有地につき、相続人の同意を要しない譲渡の自由という相続法上のフリー・ハンドを有した。しかし、大抵は、土地保有者は、このフリー・ハンドを行使することなく世襲的承継に委ね、行使する場合でも、それを個人としてではなく家長として、household の成員のために行使したのであって、これは相続慣習法の中にコモン・ロー上の相続法理に類似するフォーミュラが見出される当マナにおいて、とりわけ明らかに示されていると思われる。⁽²⁾ しかもさらに注目すべきは、事例〔10〕の如く、土地保有者と期待相続人の双方の「権利主張」を調整・満足させる慣行が存在していたことであった。⁽³⁾

このようにして、相続法における保有主体の個人性と譲渡の自由は、農地の家産的機能をよく媒介し得たのである。したがって、われわれは、これまでの分析を通して、ラジとともに、A・マクファーレンの次のような見解、即ち、総じて中世イングランドの農村社会が個人主義的な農業者から構成され、彼らはいかなる家族的、共同体的な抑制もなしに自由に準資本家的生産において利益の追求を図ることができた、そしてこのことは、疫病後の時期については一層そうなのであったとの見解は、少なくとも当マナに関する限り、妥当性を欠く早まった一般化であると考えられるのである。⁽⁴⁾

註(1) 一四世紀イングランドの農村構造を總体的に検討するには、土地移転の外、村落經濟の貨幣經濟化やマナ裁判における保証人制度等多面的な吟味を要するが、本稿の如く、農村構造をその基本的特質において捉えようとする場合、当面、土地移転や土地制度に絞って論ずることも許されよう。

(2) 事例〔8〕〔10〕の外、*Hales Court Rolls*, I, pp. 16, 46, 100, 101等を参照。

(3) 前述、事例〔10〕参照。

(4) Razi, *Family*, p. 36.

（一九八六年一月脱稿）

〔付記〕 本稿は一九八六年度法制史学会第三八回總會（四月二六日）における筆者の研究報告を基礎として執筆したものである。御教示を頂いた方に、厚く感謝の意を表したい。